

特別展「およげ！ゲンゴロウくん」を振り返って

かるべはるき
荻部治紀（学芸員）

11月初旬、長かった特別展が終了しました。今回の特別展は、東日本大震災の影響により当初予定していたトンボ展が延期になり、急遽代替開催を模索するという、自分にとっても忘れられない特別な特別展になりました。準備期間が企画立案から展示完成までわずか2ヶ月という、まさに突貫工事でしたが、多くの方々の血と汗でなんとかオープンできました。展示はいつもそうですが、準備は大変なのですが、終わってしまうと「楽しかったなー」という思い出と、「お客さんも喜んで下さったみたいでよかったなー」という達成感に包まれて、苦労は忘れていきます。

さて、今回の特別展は、当館の展示としては特異な「水族館のような生態展示をメインとする」ということ（図1）と、準備期間が異常に短かったこともあり、「お客さんの反応を見ながら展示を進化（深化）させる」という相互作用を重視して（インタラクティブな）対応をしていた、という2つの特徴がありました。

前者については、今回の主役の展示標本がどちらかというと「イメージはゴキブリ？」的なゲンゴロウやタガメなどのあまり見栄えのしない昆虫たちだったことへの対案として考えました。彼らは水中生活に見事に適応した形態や生態など見どころ満載なのですが、こうした情報を標本だけで伝えることは困難なもの事実ですし、「見た目や名前」に左右されて、そもそも特展室に入らないお客さんが続出するのではないかと、という危惧もありました。そこで、維持管理には苦勞することはわかっていたのですが、彼らの魅力を全面に



図1 生体展示コーナー入口。

押し出した「生きた虫の生態を見せる」という手法をとりました。結果的にはこれは「当たり」で、感想ノートの記述でも、普通標本には興味なさそうな女性の「ゲンゴロウかわいい！」というものが目立ちました。まあ、かわいいかどうかは主観的なものですが、対象への拒絶感からは何も生まれませんので、まずは興味を持っていただけたことはよかったですと思います。入場されたお客さんを見ていると、一般の方々が生体展示を見て「タガメ大きい！」などと叫び、標本は世界最大の種などをちょこっと、あとは数百枚の生態写真が迫力のコーナーなどをご覧になる方が多かったです。時折、生体や標本、解説パネルを食い入るように見つめているその道の方々もおられました。なお、水生昆虫の多くは絶滅の危機に瀕しており、これも感想ノートを見るとそういう悲惨な実態の一端を共有していただけたものと思います。

さて、今回の展示ではちょうど夏場の繁殖期を迎える虫たちも多かったもので、通常の展示と違って展示の見どころが新たに現れるものもあったことも特徴だったと思います。そこで常設の展示解説パネルだけではなく、たとえばタガメが産卵・保育を始めると（タガメはオスが卵を保護する習性があります（図2）、「ただいまイクメン中」というミニ解説を設置したりして、理解を深めていただくようにしま



図2 卵を保護するタガメのオス。

した。また、ゲンゴロウを「下から見てみたい！」という声や「ゲンゴロウの写真が欲しい」という要望に応えるために、これまでにない新しいスタイルの展示手法を検討中の学芸員グループと相談して「ゲンゴロウくん下から行きます！」という、底面透明ガラスを利用して通常見られない角度から観察できるセットを新設したり、特別展オリジナルの水生昆虫カードを配布したりしました。これらは、準備に時間がかかったので、特別展最後の一ヶ月程度しか実施できませんでしたが、好評でした。また、展示室内で子どもたちが楽しめるように、水生昆虫タッチプール（図3）、オリジナルのゲンゴロウ折り紙コーナーやこれもオリジナルの水生昆虫の切り絵コーナーなどを開設し、さまざまな形で水生昆虫たちとふれあう場を作るように心がけました。

このように、いろいろなアプローチをした展示でしたが、皆さんはご覧いただけただけでしょうか？2012年は延期になったトンボ展がいよいよ開催されます。今回の教訓も活かし、次回も工夫した展示を展開したいと思っていますので、乞うご期待！



図3 水生昆虫タッチコーナー。

自然科学のとびら
第17巻4号（通巻67号）
2011年12月15日発行
発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 斎藤靖二
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846
<http://nh.kanagawa-museum.jp/>
編集 山下浩之
印刷所 文化堂印刷株式会社

© 2011 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

